保育と行事　　～そのあり方の再考～

羽溪　了（龍谷大学 短期大学部）

多くの保育の場では、年間行事として、毎月のように様々な行事やイベントが行なわ

れている。こどもの成長の節目を祝う行事、伝統的行事、こどもの日々の活動やその成

長を披露する行事、新しい体験や日々の活動の幅を広げる行事、家族との関わりを育て

る行事、健康や安全を目的とした行事、各園が大切にしたいことを目的とした行事らが

あげられよう。これらの年中行事は、こども達がそこでの経験を通して、豊かな感性や

情緒を育んでいくために重要な役割を担っているといえよう。

しかしその一方、その行事の多さやその中身のあり方によって、主役であるべきこど

もや、関わる保育者や、保護者自身が苦しんでいるとの指摘も数々ある。その主たる原

因として、行事を通してこどもの育ちやその後如何に展開するか等についての「ねらい」や「目的」が置き去りにされ、所謂手段が目的化していること、その挙げ句が、大人の都合で決められる、所謂「見栄え」や「世間受け」重視の拘りがあげられる。

保育所保育指針や幼稚園教育要領においては、領域「環境」の〝内容〟に示される季節の行事であるが、今回は、発表者の専門領域「表現」から、保育のねらいを通して、当たり前のように行われる行事を見つめ直す提案を試みたい。そして本発表を通して、真宗保育の中で行われる宗教行事の見直しへの視座となることを目的としたい。

こどもの想像力を養うことの重要性は、様々な場で言われ続けている。想像とは、目

には見えないものを見る（感じる）ことである。そして、その想像する力は、「これは

一体、なんだろう？」という想

像から探求心へと育ち、そこからこどもの気づきや学び

へとつながる。又、その想像は誰かに伝えたい、共有したいという思いとなり、表現（創

造）につながり、それらの経験や活動を通して心（感性）を豊かに育んでいく。

幼児期の豊かな感性と表現は、「生活の様々な場面で美しいものや心を動かす出来事

に触れてイメージを豊かにし、表現に関わる経験を積み重ねたり、楽しさを味わったり

しながら、育まれていく。」とされる。この様なこどもの心をかき立てる経験や環境こ

そが、豊かな感性と表現につながる、大切なものなのである。すなわち、こどもの生活

全てが、そのような位置づけとして考え、扱われているのか？という視点で、保育にお

ける行事をみていきたい。

本発表では、様々な季節行事の中での２月行事として「節分」を取りあげる。多くの

現場では、鬼(保育者等の着ぐるみ)が登場し、こども達を怖がらせるか、逆に悪者とし

て、豆の一斉攻撃の的となる。そしてその翌日は、「鬼の絵を描きましょう」、「鬼のお面を作りましょう」という活動となり、大概が個々のこどもの思いがほとんど反映されない、形骸化した同じ様な表現に陥る。このような行事が、こどもの想像力や創造力を育てる、豊かな感性が育つ活動とたり得るのか？季節行事の既成概念を壊すことからスタートし実践される保育園の実践事例を紹介し、保育の場での当たり前を、保育のねらいから見直す提言を行い、今後の課題をフロアーと共有していきたい。